現代日本文學全集
[20]

阿部次郎集

上田敏集

川村集

上田敏集

厨川白村集

阿部次郎集

改造社版

杉浦非水裝幀

昭和四年十二月十一日印刷
昭和四年十二月十三日發行

現代日本文學全集 第二十篇

著者代表 阿部次郎

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

「上田・厨川・阿部集」目次

上田　敏集

巻頭寫眞（照影・筆蹟）

序

詩聖ダンテ……四
わかきダンテ……五
わかきダンテの學殖……六
神曲序説……一一
神曲地獄界の一絶唱……一三
神曲の自然敍景法……二
近代の神曲註疏……三五
神曲梗概……四三
伊曾保物語考……四六
希臘思潮を論ず……九四
典雅沈静の美術……一一六
細心精緻の學風……一三
幽趣微韻……一三
印度文學……一四一
象徴詩釋義……一四三
自由詩……一四六
「海潮音」序……一四八
みじか夜……一五五
よひやみ……一五七
南露春宵……一六一
足弱車……一六三
黒瞳……一六四
第四賢人……一六八
ハルレム……一七四
石工……一八一
欝金草賣……一八一
五本の指……一八二
胡弓……一八二
煉金道士……一八二
サバトの門立……一八三
法王の祈禱……一八三
椰子の樹……一八五
燕の歌……一八七
床……一八八
薄暮の曲……一八八
落葉……一八九
瞻望……一八九
小曲……一八九
伴奏……一九〇
黄昏……一九〇
印度古詩……一九一
お月様のなげきぶし……一九一
温室……一九一
俊傑……一九二

雨替橋……一九四
蕎薇連禱……一九五
（附）故國（九三）　鷺の歌（一三五）　山のあなた（一三一）　ピエロオの詞、蟾蜍（一四〇）　海のあなたの（一四五）　嗟嘆、薄紗の帳（一四七）　このをとめ（一五四）　わすれな草（一五六）　ちやるめら（一六〇）　春夜（一六三）　梟（一六七）　畏怖（一七三）　髮（一八一）　夏の夜、雪（一八四）　白楊（一八七）
略年譜……二〇〇

厨川白村集

巻頭寫眞（照影・筆蹟）……二〇四
序
文藝思潮論……二〇五
小泉先生……二五四
わかき藝術家のむれ……二六七
象牙の塔を出て……二七五
藝術としての漫畫……二九九
近代の戀愛觀……三〇五
惡魔の宗教……三三〇
夢なりしか……三四六
帽子を追ふ事……三四九
天衣……三五二
『エヴの歌』より……三五二
F——に……三五二
（附）ヘレンのきみに（二七四）　わがなやみ、月下（三六一）
略年譜……三六三

阿部次郎集

巻頭寫眞（照影）
序に代へて（筆蹟）……三九六
ニイチェのツァラツストラ解釋並びに批評……三五七
ダンテの「神曲」と
ニイチェの「ツァラツストラ」……四三〇
人格主義……四五五
社會生活の內面的根據……四五五
當來社會の根本原理……四六四
人格と世界……四七三
ルッェルンの春……四八四
心頭小景……四九七
斷片……四九七
聖フランシスとステンダール……五〇〇
蝦と蟹……五〇〇
早春の賦……五一一
靜寂……五二二
雜草……五二三
（附）ある朝（四九六）　電車の中にて、同じく（五二四）
年譜……五二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上田敏集

序

上田敏先生

識ること餘りに深奥なれば猪突の蠻勇は自らその勢ひを殺がれざるを得ないのは自明の理である。上田敏先生が一見卑俗から超然とした存在の如く思惟されたのは畢竟かうした理由に緣るのではあるまいか。それは恰度深淵が焦狂な泡立ちを見せないやうなものである。而かもそれは決して枯死停頓を意味してゐるのでは無い。そこには先生が好んで用ゐられた所謂「萬法流轉」の姿相が生々として動いて熄むときないのを觀取するに我々は苦しまない。我が文學史に於けるかの明治二十年代末期は、時宛かも日清戰役の後を承けて、人心は漸く小成に驕り、その餘波を受けて藝苑と云はず、學界と云はず徒らに大言壯語するの輩の跳梁跋扈するを見ること比々然らざるなき時代であつた。然るに敢然として謂はば思想混亂期の歸趨に迷へるこの時流に抽んでて夙に「細心精緻の學風」を唱道し、美術には典雅と沈靜あるべきを訓へ、研究には溯源の尙ぶべきを稱へ、遠く希羅の古典さては希伯來、古印度の諸經典にまで溫ねて世界思潮の眞諦に參し、幽かなる趣、微なる韻にすらも全靈の窓を開くことを儕輩に向つて慫慂し、一面また傳統に富める祖國の人文は先生の人格に於いてその秀拔なる肉化を偲ばしむるよき德川人士の趣味好尙に培はれて先生の所謂たとしへなき芳香を漲らせつゝ燎亂の開花期をやがてはその結實を我々に示さんとされた。すべてこれらが齡やうやく二十を越ゆる兩三、身學窓を出づる前後、白面豐頰の一青年に過ぎなかつた當年の先生によつて成された業蹟の一部であることを知れば、この若き詩人學匠が如何に深く藏したか蓋しそれは驚異以外の何ものでも無い。

凡そ斯くの如きは根蔕は飽くまで大地に深く張り、樹枝を思ひのまゝに擴げた亭々たる喬木の、梢を過ぐる最も微なる曉風をすらいち早く感じて震へ戰ぐにも比べられぬであらうか、而かも青春既に老成せる一家の風を具へ得た先生の全風丰の躍如として眼前にあるを想はしめられるのは職としてその天賦の才能の豐かなりしに加ふるに不屈不撓不斷の學的精進の賚であらねばならない。

飜つて想ふ、先生が易簀に先つ四分の一世紀に於ける我が國の純文學は、さらにそれは今なほ持續しつゝある事實であるが、先生に依つて恆にその先聲を與へられたと斷じては過言であらうが、尠くとも內部生命の最も純なるものがその發言の契機、方法を指示されたことを主張していゝことは如上の理由によつて明白である。汪然として湧き起る幾多の新しく力あるものへの先生の理解ある包括力は、いかなる場合にも先生の嚴正なる批判選擇に耐へ得るものである限りそれに向つて手を差し伸べることを否まれなかつたばかりで無くそれらが當に由つて來たるべき典據を與へることに勞を吝まれなかつた。これ卽ち先生の一個攷學の士として終始さるゝことから以上のさうした颯爽たる飛躍が永く藝苑の感謝を專らにせらるゝ所以である。

先生はその晩年に於いては「人生の爲の藝術」にその思索活動の目標を置かれた如く思惟さるゝが、それはそれとして玆に先生の全的姿相を改めて仰ぎ得る機會を與へられたことに對して僭越を顧みず後學としての歡喜を披瀝する。

昭和四年十一月末

富田碎花

詩聖ダンテ

文學博士上田萬年氏に獻ず

Dibinus Poeta Dante.
—De Mon. II. iii.

序

文藝の趣味は、廣濶にして同情洽ねからむこそ望ましけれど、衷心の理想は、常に高遠雄大の傑作にむかひて、天才の鼓吹にみづからの進境を圖るべきなり。南歐の詩聖ダンテ・アリギエリの閲歴は、後人の志を勵すべき崢嶸の一生にして、述作、また詩文の高潮に達す。靈妙の詩才、雄渾の智力、牢乎たる道念、劇詩の力あり、抒情の熱あり、敍事の巧あるもの、眞に萬古の秀什なりかし。としごろ、著者はこの達人の傑作を尊崇して、時々、其峻高なる妙趣をかいまみ、常に其壯麗なる結構に心奪はるゝ感歎の餘は、ところどころの定期刊行に、零碎の小論文を寄せて、既に數種にのぼりしを、茲に嚴密なる訂正を施して稿の半を更へ、さらに、また新らしく「神曲」の梗概二百餘頁をものして、まづ此神品の由來を說き、題名を考へ、詩形を溫ね、又、詩材、結構を釋して、趣旨の大綱を提げ、詩中曆日の細目に亙り、終に「神曲」そのものの略解を述ぶ。「地獄界」「淨罪界」「天堂界」、あはせて百歌各々の梗概を示すに、及ぶべくば、直に大詩人みづからの詞を譯して、原詩の姿を彷彿たらしめむと計りぬ。曲中の人物は洩なく揭げ、地名、人名の和訓には、おほかた、おのがじしの本國音を以てしたれど、詩人自らの用ゐたる伊語を追記し、また拔萃の名句には、一々原詩を併擧して、遒勁の筆路、婉美の聲調を忍ばしめたれば、あながちに原文を離れたるみだらの摘要にあらずと信ず。

「饗宴篇」の冒頭に、ダンテは希臘古哲の壯快なる名言「人みな自ら智を求む」といふを揭げて、學藝の尊威を說きたり。語を進めて曰く、「あはれ、禍ひなる哉、天人のみけ具へたる卓にむかふ、すくなの人よ。さても禍ひなり、たゞ羊のさまに物くふともがら。されど人おのづから互に親み、友は各其愛する者の惑を悲む。かるが故に、かの尊き卓前の人は、草や木の實をくらふなる四足とともにさまよふ者を哀れむことといと切なり。かくて慈悲は善行の母なれば、智惠ある人々は、まことに貧しきともがらに、吝しげなく富をわかち與へて、そのさま、宛も、上にしるせる自然の渴を醫やすべき命の泉をさながらなり。さても、われは、かのあてなる卓に坐りたりとにあらねど、世の常の群れを放れて、そこなる人々の足のもとに、いひのこぼれを拾ひつゝ、わが身の上を思はぬにもあらずして、すこしづゝ集めにたるみけの、あまりのめでたさに後に殘しゝ人々の憐れなる一生をおもひ知りぬ。されば、不幸の人々の爲にとて、聊か、貯へたるを、さきに

少しばかり、示し與へて、世の渇望を更に加へき」と。かゝるたけ高き達人の譬喩をわが身にひきあてむもおほけなけれど、この小冊子の著者も、先覺の研め明めしダンテ學の結果を拾ひて、いひしらぬ歡、慰となりしもの、玆に公にして、まだ此詩聖に緣無き世間の人に供ふ。敢て新らたなる發見を斯學に加へたるにあらず、ギッテ、スカルタッチニ、フィラレテス、ムウア、ガアドナア、トインビイ等諸大家の著無かりせば、本論の出づることなかりけむも、孫引の譏うしろめたきを避けて、旁證、引例、おほかたは源泉に遡りて、親しく確め、諸家推論の逕路を辿り、憑據の輕重を計りて、ダンテ學の難問に對して、決然たる態度なきにしもあらず。例へば、ベアトリチェ虚實の爭に關しては、現實説を採り、「地獄界」第一歌、獵犬の解釋に就ては、本書二一九頁（本集五九頁）の論を抱けり。されど眇たる數百葉の冊子、敢て斯學の蘊奥を盡せりとなさむや、單にダンテ入門の梯を以て期せり。たゞ世を擧て死學に赴き、功利に投ずる今の學界に、せめては、文藝の清境に遊びて、詩文の靈興を味はむとする人々の導たるを得ば幸なり。

しかれども、文藝の高俊なるものは、文辭の巧、結構の美あるのみならず、この秀拔なる妙趣を味ふ者には、一生の伴侶、あるはなほふさはしくいはゞ師友ともなりて、まづ人生の大疑を思はしめ、やがて行旅の煩悶を醫やし、かのミルトンにあらねども「たとひ、生れ落ちぬ、わざはひの世に、わざはひの世に、生れ落ちぬ、わざはひの口に」とも、

Though fall'n on evil days,
On evil days though fall'n, and evil tongues; —Paradise Lost, VII, 25—26.

新らしきいさみを勵し、すが〳〵しき力を養はむ。即ちダンテの如き天才はわれらを動して感歎を促すのみならず、こゝに、靜寧、安心、慰藉を求めしむ。苟も學藝の淸泉に汲みて人生の歸趣を思ふ者、ゼノアびと、ブランカ・ドリヤの如く、「のみくひして眠り、衣つくるのみ」

E mangiu e bee e dorme e veste panni.
—Inf. XXXIII, 141.

にしてえあらむや。著者、今淺才を强ひて、「神曲」の紹介を敢てするは、一代學風の枯淡、浚趣味なるに激し、人心一般の萎靡を憫して、文藝の尊威を知らざる俗流を斥けむとしてなり。

詩聖ダンテの研鑽に精緻を盡したる基督曆第十九世紀を送りて、第二十世紀初年、はじめて絶東の文壇より遙に斯學の小著を拵ぐ。（ダンテ幻想以來六百二年十二月・東京）

わかきダンテ

ダンテ・アリギエリ Dante Alighieri の若姿は、美はしくしたる友ジョット Giotto（一二七六—一三三六）の筆に殘りて、今も伊太利亞フィレンゼのポデスタ館にありといふ。ポデスタとは、ダンテの世、こゝの市政に與りて、司法の權を握りたる奉行の職なり。其後政體の變革と共に、この廢邸を囚囹の用に供したれば、自らバルジェルロの館と名く。こゝの禮拜堂の壁畫に、ジョットは淸新の天才を勵して、春の鶯の歌ひ試むる如き情を丹青に託し、天堂樂園のけしきをゑがきたり。いと高きには莊嚴慈相基

督の御座、其下にはフィレンゼの紋彫りたる標の楯を据ゑて、天人之を支ふ。男女の聖衆左右に羅列して、正面にこの市の參政一群を並べたるうち、冠したるものふたり、其ひとりの右に、われらの詩人はたてり。柘榴の果を手にして、當時の時花なりし頭巾形の落ちかゝりたる帽を戴く。蓋しジョットが漸く名を成さむとするの時の作にして、ダンテとの交愈々うるはしく、戀を語り、學を共にして、靜に天才を養ひし比なれば、運筆色彩の生動、清妍の趣あるもうべなり。ダンテ晩年の姿は、神曲の文辭を味ふ者の容易に想ひうる所なれど、戀の歌を編み、琴を鳴らして、あえかなる姿をおひし青春の俤は忍び難きを、湮沒六百年のけふ、其友の遺筆に、過ぎにし風流を浮べうる樂しさを思へ。

ダンテ學者の考證に據れば、此畫は、千二百九十年より千三百年まで即ち、われらの詩人、二十五歳より三十五歳までの寫像なりといふ。フィリッポ・ギルラニ Filippo Villani（一三四一）の史乘既に之を記し、ジァノッツオ・マネッティ Giannozzo Manetti 亦之を傳へ、千五百五十年板ジォルジォ・ヴァザリ Giorgio Vasari（一五〇二—一五六五）の「畫工傳」にも見ゆ。Il quale, fra gli altri, ritrasse, come ancor oggi si vede, nella cappella del palagio del Podestà di Firenze, Dante Alighieri, coetaneo ed amico suo grandissimo, e non meno famoso poeta che si fusse ne' medesimi tempi Giotto pittore, しかるに其後フィレンゼの勢威漸く墜ちて、美術道德ともに衰へ、官第亦牢獄の用をなし、此堂も終に倉庫となるに至て、金泥朱粉の壁畫、徒らに白堊に蔽はれたれば、近代に及びて、此市の考古家モレニは古書に徵して、此畫を探ぬること一年、終に效なくしてやみしが、千八百四十年に至り、伊人オオブレエ・ベッキ、英人シイモア・カアカップ、米人ヘンリイ・ワイルドの三氏ダンテ尊崇の心深かりしまゝ、此古壁を探り究めて、終に價限りなき此名什を發見し得たり。

今このダンテの姿にむかひて、諸〻の思を構ふるに當り、先づ、いたく吾等を動かすは、つよみとやさしみとの一致なり。この顏の線には、女にてみまほしき溫柔もあれど、口元締り、鼻高く、眼に戀の潤ありて、しかもまた憂悲の燃ゆる如く、落つきある口の優雅なるもさることながら、脣は卑みの影を湛ふ。望豐けき人の世の春をとめたる若姿、おひさき籠る天才の、湖に眠る思ありき。「ソネットオ」をあみ「カンゾオネ」を聯ねて、風流の才をきほひし俤を見て、ボッカッチオ Boccaccio（一三一三—一三七五）の傳なるダンテ晩年の姿をきくに、「丈はよのつねにして……やゝ屈みたるあゆみ、威ありて猛からず、何時もよき衣きて、風俗、齡に適ひたり。面長の鷲形鼻、眼大なるかた、顎ひろく、やゝうけ口なり。色淺黑く、髮も髯も濃く、黑く、縮れて、顏はいつも憂はしく物思ある如し」となり。Mediocre statura……, andò alquanto curvetto……, grave e mansueto, d' onestissimi panni sempre vestito, in quell' abito che era alla sua maturità conveneyole. Il suo valte fu lungo, e 'l naso aquilino, e gli occhi anzi grossi che piccioli, le mascelle grandi, e del labbro di sotto era quel di sopra avanzato ; e il colore era bruno, e i capelli e la barba spessi, neri e crispi, e sempre nella faccia malinconico e pensoso. この晩年のけはひ、さきの繪姿に比べて、一生の閱歷、尋ね來れば、彼は終に架上の古書にあらず、秋の夜の燈挑げ盡し、香ひよき衣などひきかけても味ふべし。

ダンテの世、嶺南の地は、グエルフォ、ギベ

リイネの爭亂に騷ぎぬ。此兩黨の歴史は、市民制と封建制、伊太利亞民族と北歐渡來の貴族、法王と皇帝との競爭史なり。故里フィレンゼはもとトスカアナの一邑に過ぎざりしが、羅馬帝政の末路より漸く榮え、中世の終には、既に半島の北部に覇を稱したれば、從てグエルフォ Guelfo ギベリイネ Ghibelline の爭亂にも投じぬ。アルノ河の流に嚴かめしき城郭を構へて、封建の名殘を慕ひたる貴族の徒も、漸く近世の曙光に觸れて、この市の富榮に盡瘁せしかば、グエルフォ黨自ら勝を制して、優に皇帝の力を抑へたれども、朋黨の鬪やがて起り、ブオン・デル・モンティ、アミディの兩家姻親の縺、延て、全都六十二家の爭となり、皇帝フェデリゴ二世、アミディの家を助けて、ギベリイネの旗幟を樹てしより、そも〳〵フィレンゼ府の内亂は起りぬ。千二百四十九年、グエルフォ大敗してアルノの谷に退く。踰て、二年皇帝崩御して、此黨再び市内に歸り、勢漸くギベリイネを壓せしが千二百六十年アルビア河のほとり、モンタペルティに兩黨大に戰ひし時、ギベリイネ方には勇將ファリナタあり、又マンフレッド王の率ゐたる獨逸騎兵の後殿さへありければ、終にグエルフォの敗北に歸し、全黨相携へてルッカに退きぬ。四十九年の役をあはせて、グエルフォ黨の退去前後二回なりとす。ダンテの生れたるフィレンゼは此の如き内訌に充ちたり。

ダンテは千二百六十五年五月（ボッテは三十日といふ）を以てフィレンゼに生れ、聖ジオヴンニの御堂に受洗したり(Il mio bel San Giovanni)。極めて貴き生れにあらねど、先考の名は誇るに足る。「神曲」天堂界、一五、火星天、祖先カッチァグイダ Cacciaguida のめぐりあひに據れば、此遠祖は千九十年頃の生にして、千百四十七年、コンラッド三世の十字軍に從ひ、功を以て勳爵士となり、聖地に戰死したりといふ。其妻はポオ河の谷に生れぬとあれば、フェルララの人ならむ。アルディギェリ Aldighieri の名に因て考ふれば、蓋し北歐民族の後裔なるべし。アルディゲル Aldiger は獨逸の語にして槍の達人といふ義なり。されば、ダンテは北歐南歐の血を享けて、二者の處長を具へたるか。カッチァグイダの子は母姙を冒して、アリギェロ Alighiero といひ、それより代々の家名となしぬ。一子ベルリンチオネ Bellincione あり、其子またアリギェロといふを、ダンテの父とす。法律を業としたる小貴族にして、史家ギルラニの所謂一門閥たかく勢猛なるきはにあらねば、生平の主義また從てグエルフォに傾けり。はじめの妻ベルラ Bella 即ち詩人の母は敦厚篤實の性ありしとのみ傳りて、終に誰家の女なるをしらず。詩人が幼少の逸事今日に殘れるもの少し。

然れども、ダンテ一生のふりむきは、既に其幼時に定められたり。それは、世に珍らしき戀のしわざにして、千二百九十二年知の交に物したる「新生」Vita Nuova といふ草子を讀めば、性靈の高俊、心情の溫藉、名花にほひ久しきが如し。われらこゝにダンテみづからの戀の物語をきかむ。

「ギイタ・ヌオヴ」の起語に曰く「心おぼえの本の、あるくだりに、筆の運びも覺束なく、新らしき世始れりと物しゝが、其下に、かいつけたる言葉を、今此草子にのせて公にす。殘りなしとにはあらねど、大方の心は汲みて餘さじ」と。第二節より書き初めたる初戀のあはれは、幾世經るとも消えまじき優婉、高雅の氣韻を含めり。「われ生れおちてよりこのかた、光の空、既に九たび、その大なるめぐりを遂げたる時、わが心の榮ある君は、まのあたりに現はれ給ひぬ。世の人はこの君をベアトリチェ Beatrice

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とよべども、眞義を知らずしてたゞいふなり」と。Nove fate già, appresso al mio nascimento, era tornato lo cielo della luce quasi ad un medesimo punto, quanto alla sua propria giraziione, quando alli miei occhi apparve prima la gloriosa Donna della mia mente, la quale fu chiamata da molti Beatrice, i quali non sapeano che si chiamare.

宛もダンテ九歳、ベアトリチェ八歳の時なり。詩人の家の傍にフォルコ・ポルティナリ Folco Portinari とふ富人ありて、夕月のほのみゆる時、朝日のうらゝかなる時、其家の軒端に集くふ燕などダンテの窓より望みうるを、千二百七十四年五月朔日、西の邦の習とて、春の來るを迎へて、一年の節句を祝へば、ダンテも父に伴はれて、この家に遊びポルティナリの愛女ベアトリチェにあひぬ。「貴なる紅染の衣をきて、しとやかに慎ましく、童女の振に適ひたる帶しめたるも、につかはしき風俗なり。この時わが胸の奥にすむ魂は、いとはげしく激して、身のうちのいと弱き脈までもうち顫ひぬ。わが心のいふやう、見よわれよりも强き神は來りて、われをしろしめむとす」と。これはダンテ親らの言葉なれど、その意のいかにも優しくして、何となく懐しき心をこめたると共に、「スコラスティコ」哲理の學風に據て、寓言譬喩に傾きたるはダンテが歴史に於ける地位を示すに足る。かくて生命の琴は彈ぜられたり。その重なる絲は鳴らされたり。

天人のさまなる戀の君をおもひ、其俤を求めて、全都を彷ひありくに、其後宛も九年を經て、この君の道ゆくに遇ひたり。清き白衣に身をつゝみて、年嵩の女ふたりの間にゐたりしが、ダンテを見て、微たさいひしらぬゐやを施しぬ。玆に初めて、美音を耳にし醉ひさまだれしやうなりき。いそぎ歸りて、ひと間に籠り、かの君の情深きを、思ひつゝあれば、おぼえず眠に入りて、珍らしき事、夢みぬ。醒めて後之を一篇の「ソネットオ」に作りて、親友の間に頒てり。十八歳の少年が作なれど、音調、既に婉美の趣を具へ、心理の徑行を人化したる寓言をもて憬恍の情を歌ひいでたるは、正しくフィレンゼ新派の體なり。されば舊派の歌人は笑て之を斥けしが、グイドオ・カヴルカンティ Guido Cavalcanti（一二三〇？～一三〇〇）は同情深き返歌を送りて、これより刎頸の交を結びぬ。

この夢の後、心益々戀に傾き、氣倦み、體疲れて、思ひくづ折れしに、知友も之を怪みて、訪ひ來るもの多く、終には包み能はずして、戀故なりと答ふれば、たれを戀ひて、かくも惱めると尋ねられし時、たゞ笑て物言はざりしとは、この道の常なるべし。一日、街頭に立ちて、戀の君が生神女の御像近くゐたまふを眺むるに、宛も其あひにひとりの美女を隔てぬ。其時おもふやう、吾戀もやう〳〵包みがたくなりぬ。いでや、この人を以て吾戀の被となし、しばらくは、假に之を戀ふるが如くすべしと。それより戀歌あまたこの人に寄せて、一時、世を欺きぬといふ。戀は樣々の詭を敎ふるものかな。

ダンテの戀のなりゆきは、極めて簡單なり。ちまた大路のゆきかひに、其の俤とゐやとを樂み、續て、某の饗筵には、戀の君のらうたさにうちふるへ、又は、かの君が父の喪に居て、憂に沈みたるを、人傳にきゝたる假初ごとも、こよなき一生の大事なりけり。これは內部生命の歴史ぞ。情熱もえいで、幽情溢るゝこの一念の高潔はダンテの上に見るべきのみ。ベアトリチェは理想の權化にして、塵寰のものならず、現身にして、在天の光明を放てり。されればダンテの戀に目的なく、其物みづからぞやがて目的なりし。彼は夢にも其戀に世の常の始

終あらむを欲せざりき。人或はベアトリチェのよそに嫁ぎたるを以て、ダンテが一生を傾へしたるものとするは、未だ此戀の本質を知らざるものなり。たゞ戀の君を眺め、戀の君にゐやされむこそ、ダンテが心を傾けて願ふ所又滿足する所なりけれ。おもふ人の傍にえ堪へずとならば、さて何の爲に戀ひし給ふとは快活なる女友の訝りなり。答へて曰く、先きには、われ、かの禮の爲に戀ひしぬ。されど彼の君の知らぬ顏して通り過ぎたまふけふとなりても、戀の神はわれに一の賚を與へぬ。これのみは誰も放つこと能はじ。そは何ぞ。わが戀の君を讃むる言葉なりと。これはまことに「ギイタ・ヌオヴ」のみならず、ダンテの一生を貫きたる大理想にして戀の君の導によりて、天堂に上ぼりしも、ベアトリチェ崇拜の一大事を心にとめたればなり。

ベアトリチェは、千二百九十年六月九日、芳齡二十四歲、百合の花のさかりに逝きぬ。「ギイタ・ヌオヴ」の歌を集め、散文を加へて、世に公にしたるは千二百九十二年のころならむ。此玲瓏優雅なる草子のうち、ベアトリチェの死を歎きて、さしもあえかなる君はうせたりと歌ひたる自然の調は、遠ながく愁人の恨を慰き、又は戀の君の一周忌に、たれこめてたゞ何となく天人の姿を忍びつゝありしあたりは、蜥蜴も眠むる伊太利亞の靜なる夏を忍ばしめ、夕暮の柔き空の下に、草花のかをり、野に滿ちたる如く、柔かき髮のにほひ、戀の君の美舌、あはれしる友の繙歌など、かゝるものは「ギイタ・ヌオヴ」の後景にありて、しかも雅俚淸淡なる妙趣を損はず、情籠り、詞舒びて、心のまゝの誠を歌ひ出でたる此等淸新の體を讀めば、ダンテ自ら、「ドルチェ・スティル・ヌオヴ」Dolce stil nuovo と呼びしも理りなるかな。

ダンテ既に淸新體を以て自ら唱へ、古の絆をのがれ、隣邦の響を棄つ。高雅にして而も自らなる文語は其の求むる所なりき。實にかれが功績の大なるものは、故國の爲に俗語を彫琢して、暢達の標準語を定めしにありとす。「新生」に俗語を用ゐたるは、心友カヴルカンティの勸にもよれど、實は麗人の眼に觸れむ事を望みてなり。彼未だ羅甸を斥けず。例へば「饗宴篇」Il Convito といふ哲理の著作にも、なほ之を揚げて吾文の俗語なるを辯護すること甚だ勉めたれど、國語の將來につきて、かれが當代に珍らしき卓見を有せしは、晩年の作「俗語論」De Vulgare Eloquentiâ に現はる。

當時の學風として、ダンテは先づ言語の起源より說き初め、何故に獨り人間のみ之を有して、天人獸類に授けられざりしか、アダムの詞はいかなりけむと設問し、巴比倫尼亞に於ける言語の錯亂に論及して、終に人類の言語に種別を生じたるを述ぶ。歐洲に三種の言語あり。希臘語、日耳曼語、羅甸語とす。其一、羅甸の後裔は今の所謂羅曼語なり。ダンテは早く此語族の分枝間に於ける關係、一致、通性を看破し、これにも亦三種の別あるを辨じぬ。然定語の異なれるを以て區別とす。「然り」といふ言葉はプロヴァンスに「オック」といひ、北佛に「オイル」といひ、伊太利亞に「シイ」といふ。又曰く、同種の語と雖も、地方に因て變化あり、階級を以て異れりと。

羅曼語のいづれか最も優れたる。ダンテは、伊語の羅甸語に最も近く、また既に淸新の抒情歌を出しゝが故に、之を秀たりとす。而して彼の望む所は伊太利亞全土を通じて、解せらるべき標準語にして、特殊の方言にあらねば、俗語の彫琢を以て、當時の急務なりと唱ふ。曰く吾等伊太利亞の人、今宮廷を有せざるも、之

を成すべき素を缺きたるにあらず、伊語の改善は教育ある人士の責任ならずや。首都に於て、宮廷に於て、學儒、縉紳に因て、此業は大成せられざる可からずと。かくて彼は幽婉の抒情詩、崇美の「神曲」を物して、文藝の境に子女の語を高め、近歐言語のうち、音韻最も豐に、語法頗る剴切なる伊太利亞語の組織を完うしえたり。

さるにても、心のまゝに、理想現實の二界に跨りうるは、天才の特權なるかな。ダンテは、かくて其世の俗言を以て戀の歌をよみ、美しき夢幻の界に遊びしと共に、劍を把て故國の爲に戰ふこと幾度に及びぬ。千二百八十九年六月十一日は、カムパルディノの戰に出でて遊騎隊に加り、同年八月カプロオナの圍に與り、千二百九十五年の頃ジェムマ・デ・ドナティ Gemma de' Donati を娶りて、これより政界に投ず。この間フィレンゼの政體漸く變じ、ゲエルフォ黨の勝利に依て、内訌の源全く絶えたる如くなりしが、實はピストイヤにかゝれる暗雲漸く擴りて一大狂雨まさに來らむとす。

千三百年選ばれて、フィレンゼのプリオレに就けり。齡、正に三拾有五、人生の半といふ。その春聖金曜のよべ、影くらき森に迷ふを「神曲」冒頭の想の劈頭とす。飄零の後半生、もとより興味ある傳紀なれど、求めて達せざりし靜寧のあとを追ひて、諸侯に客たりし逐客の起居を數へむよりは、寧ろ「神曲」に影うつせる内部生命の史をたどるに若かざるべし。

わかきダンテの學殖

世のダンテを究むる者、其學殖を窺はむとして、已まざるは、かれが中世の末葉に生れて、其學藝を代表し、延いて近世思潮の發動に偉功ありしが故なれど、一には此詩人の盛名に驚き、其令聲にけおさるゝが爲なり。近世ダンテ學の精緻なる研究に據れば、彼、はじめより學殖必ずしも深遠なりしに非らず、神童の譽、幼少の年に嘖々たりしにも非らざりき。

ダンテが少壯の教育に就て、ボルラニの史乘、既に何の說く所無く、ボッカッチオ、ブルウニの註疏、亦明晰の解を與ふる無し。餘の傳紀者が言を構ふるは、我佛の頭に、幻の光明を見る類ひにして、事實を重ぜざる想像說なり。ダンテが學殖の進歩は單に其自ら語りし所を基とせざるべからず。

古代羅馬の代より、中世に亙りて、教育は七種の學藝に分たれたり。中世の人、其三種を列ねて、三學 Trivium といふ。一を文典といひ、羅甸語の習得を事とす。二を辯證といひ、推論思議の法則、卽ち因明の類なり。三を修辭といひ、羅甸律語の學を含み、やがて作詩の法を收む。これらは、近世の所謂、普通教育にして少しく文字を知る者の云々せざる可からざるものとす。他の四種、卽ち專門教育の程度にあるものを、四科 Quadrivium といひ、算數、幾何、音樂、天文の四を併稱す。此他の科學に至りては、根基未だ定らず、研鑽、法を謬り、化學は夢幻の黃金を求め、理學は眩目の妖術を事とせりと雖も、萌芽は、夙に學匠の間に生じて、零碎の知識、既に大學の一科をなしぬ。謂ふに、ダンテの教育も、七藝、其基を爲しゝなるべく、かれ其「饗宴篇」に說く一四に、七藝を七遊星に倣らへ、究理、形而上學の二科を恆星天に類へ、倫理の學を原動天に對し、終に神學を大光明天に象りしを以て、其據と爲すに足る。而してダンテが成年の前に、凡て這般の學藝を修得したりし證に至ては、吾等毫も知らず。

ダンテが少壯の學殖は、「新生」の著に於て

窺ふ可し。近代の批判は、千二百九十二年、九十五年の交を以て、此書の成りし時期と定む。まだ三十の聲を聞かざるに、幽婉雅健なる此著をものしゝは、曠世の詩才、熱烈の情感あるを明かにして餘あれど、未だ學殖の當代に冠たりしを示すに足らず。「神曲」其他晩年の作に顯はれたる深邃の識見なかりしとも、この清楚なる內部生命史は、彼が幽麗の筆より落ち得べかりしなり。されど彼は、この時、既に羅甸に熟し、佛蘭西の歌に通じ、プロヴンス調を諳じ、加ふるにトスカアナ俗語の、雅馴なる語脈、優麗なる聲音、彼が詩文の上に顯はれて、委曲綿綿の趣を盡したるを見れば、後年の才華こゝにほひ出でて、餘韻はやく讚歎を促すに餘あるを知る。羅甸は彼の精熟する所、凡俗のなみを拔き、書翰、註疏の體に運用して、窘感の蹤なかりしのみか、始は「新生」の著をものすに、此羅甸語を用ゐむと爲しゝも、心友グイドオ・カヴルカンティの勸に聽きて、トスカアナの俗語に和らげたり。羅甸の詩人中、彼の最も愛誦せしはエルギリウス、ホラティウス、ルカアヌス等にして、特にマントゥアの騷人を敬慕精讀し、スタティウスの詩亦愛玩の一たり。或はダンテに、希臘詩文の素養ありきと唱ふるものあれど、內外の證、一も玆に指すあらず。かれがホメエロスの引證は、確かに羅甸を介したるなり。プロヴンスの歌謠は、さはいへど、ダンテの詩觴に染みて、壯年の律語に遺響を及ぼし、パレルモ宮廷の詩格、就中感化の力ありとす。

「饗宴篇」の全卷を涉獵して、學藝に關するダンテの態度を窺ひ、之を其創作に徵すれば、畧、かれが學殖の如何を知る。煩瑣哲學は、素より當時の風潮にして、天才彼の如きも之を脫する能はず、修辭の學に據て、章句の解體を試みし蹤も見るべく、又は情感の分析識別に意を注ぎ、諸般の精神的活動に心を用ゐしは、心理生理等の學にも淺からざりしを示せり。畫を學びぬといふも、星辰の運行を察せりといふも、又樂人と往來して親交ありきといふも、あながちに後代が此天才に獻ぜし崇拜の餘波にもあらざるべし。彼、はやく當代の詩風を脫して所謂「清新體」を粉めし時、學殖既に俗衆を拔きて、儕輩の間に尊重せられしこと說くを俟たず。たゞ後世文藝復興期の才人アルベルティ Alberti（一四〇四―一四七二）レオナルド Leonardo（一四五二―一五一九）或はピコ・デルラ・ミランドラ Pico della Mirandola（一四六三―一四九四）の亞流に比して、博涉の譽をあらそふこと能はざるなり。要するにダンテが學殖は、必ずしも、青春の期に蓄へられたるに非ず、寧ろ逐客となりて、諸侯の第を周遊せし後半生を以て修學の期と爲さむか。

ブルネット・ラティニ Brunetto Latini をダンテの師となす者は、「神曲」地獄界一五の五五以下を證とすれど、ラティニが政界の活動よりするも、其地位よりするも、庠序を設けて子弟の教育に關かりしとは想ひ得べくもあらず、加ふるに玆なるダンテの文辭、婉曲して剴切ならず、ラティニの家に就て親しく學べりと明言せざるを以て察すれば、兩者の關係は贄を執りたる師弟のそれならで、譽を慕ひ志を起しゝきはのことなるべし。評家云ふ、ラティニのダンテに及ぼしゝ感化は、寧ろ政治思想の上にありて學藝に緣淺かりきと。

春の虹のやうなる短命をも以てベアトリチェの逝きし後一年、ダンテ二十六歳にして、未だボエティウスの「哲學安慰論」キケロが「友情說」を知らず、此二編を繙くに當て、頗る困む所ありきといふ。後人說を爲して曰く、玆に困難といふは辭章を解するの難きをいへりしに非らずして、哲理を辨するの易からざりしを指せりと。されど自ら語る所を以て察するに、其

困難と稱するうち、語義の難解を歎ぜしものさへありて、明に、未だ完全なる古典學者ならざりしを顯せり。彼又此時に至る迄、哲學の攷究に身を委ねしことなく、二年の勤學を積みて終に斯學の趣味を得るに至れりといふ。紈綺の子弟がよろづの便を以て、學藝を享くる高等教育の堂は、彼の出入せし所にあらざりき。況んや大學をや、ダンテはある意味に於て獨學の人なり。

この故に「饗宴篇」劈頭の文に、自らを學者の間に列せざりしものは、敢て身を卑うせる謙遜の語にあらず、實は獨學の大才が、完全の學校系統を履みし凡庸の學者に對して、時に或は、其學の該博を比するに躊躇する如き情なるべし。彼自ら專攻の學者を以て任ぜず、只ベアトリチェの光榮に導かれ、憧慕の極、學藝の堂奥に進みしを知るのみ。されど精覈の識見は、常に講堂の碩儒より出でず、專攻の學者いつも秀邁の器にあらざるなり。

學藝の眞諦は含蓄豐かなる透察に在り。標示徒らに高く、理義頗る整ひて而も活動を缺き、生命に乏しきもの、吾黨は、目して大に陋とす。獨學にして卓拔の見ある人も、往々秩序ある學統を履みて而も枯淡の死學を衒ふともがらが嗤笑を免れざれど、人よ、わかきダンテの學殖を知らば、この優劣を別つに苦まざるべし。

神曲序說

幽遠深高の理想は、人類の歷史を貫徹す。おもふに吾等畢生の事業は、古來の大思想に基き、雄大深沈の精神に鼓吹せられて、大建築に一片の瓦を添へ、其織文に一縷の絲を加へて、後代の爲め、ひときは、豐麗なる遺物を造るに在り。而して個人の完成が、邦家の命運に連關し、邦家の命運が、やがて人類の趨勢歸着に向つて、重大なる干繫あるを看破したるものは、益々人生の價値と責任とに留心せざる可からざるなり。宗教と、美術と、哲學と、この三者に對して、秀技豐麗の貢獻を爲したる者は、人のうちの最大なるものにして、それが熱誠なる精神を湛へ、深遠なる思想を鏤めたるもの、これを古來の傑作妙什といふ。美術の界に、詩歌の境に、將また哲學宗教の域に跨りて、ダンテ・アリギエリの如きは、實に此大貢獻を爲したる者なり。常に謂へらくホメエロスと、聖書と沙翁と、「神曲」とは、世界文學の最も秀拔なるものにして、苟くも人生の歸趣に信仰ある者が、世を終ふまで師友とすべきものなりと。吾帝國をして、人類の歷史に、深長なる意味を有せしめむと欲する者は、宜しく、此南歐詩聖が、偉大精緻兩ながら并せ得たる妙什の機微を察して、秀拔なる美術思想の素養を積むべきなり。復、常に謂ふ、歷史に進化あるを認むるものは、またこゝに連續あるを否定す可からず。世運の盛衰し、文化の消長し、希臘あり、羅馬あり、文藝復興あるは、人類歷史の潮流に於ける、波濤の昂低する如きものか、あるは、世運の循環すること四時の來往する類ひか。されば文化の最盛時にのみ注目して、學訖れりとする者は、未だ史眼を具ふるものとはいふべからず。又單に藝術を樂む眼を以てするも、獨り盛時の作品を尋ぬるに止まらば、終に美術の當に起らむとする發生期の清新と幽婉とを感ずること能はざらむ。盛なる者必らず衰ふ。藝術の最盛時には、既に早く頹廢の氣運めぐり來て、趣味の漸く低きに就かむとする傾向、見えざるにあらず。自由美が種々の障礙を排して、發達せむとする暢伸時代こそは、やうゝ盛ならむとする過渡期に於て求む可きなれ。是故に近代の美術界は、所謂「古名匠」の繪畫を奉ずる

信仰を割きて、ラファエルロ以前の丹青に、おのづからなる清興と熱意とを味ひ、畫工が自然界に對する微虔の態度、眞摯の技巧を激稱するに至れり。吾等が中世を尊崇して、文藝の史上に其恰當なる位置を占有せしめむと欲するは、單に史的觀念の側面よりするに非らず、藝術趣味の見地よりもラファエルロ以前の後素を以て、をさ〳〵後代に劣らずとし、其清秀幽婉にして艶冶絢爛の弊に陷らざるを多とすればなり。況んやゴティコ建築式の宏大莊嚴にして、昂上的理想の本意と深沈なる宗教想とを發揮して餘韻なきをや。文藝復興は世界歴史の大變動、空前の大醒覺なりきと雖も、東羅馬滅亡、新大陸發見、活版術發明等を以て、歐洲の民心、一躍光明の世界に出現したるごとく思惟するものは、歴史發展の運路を識らざる譏を免れざるのみか、清新幽婉なる藝術を逸する憾ある可し。吾等がダンテは、中世の既に終らむとし、近世の當に起らむとする際に生れて、兩者の間に架せる一大橋梁の如く、法界に坐して、其聖門を開きし此偉人が多趣多面なるは、評家の往々端倪し得ざる所、煩瑣哲學、自由思想の并行調和したるは歴史の一奇觀にして、學者先づ中世の文藝思想史を究め、進で宗教哲理の道に入らざれば、その世界文學に於ける位置を誤まることある可し。而して、この題目は極めて興味饒なる攷究なれども、吾今茲に中世文學を論ぜむとするにあらねば、事短く、ダンテ以前伊太利亞文學發達の順序を述べむ。

伊太利亞は、他の西歐諸國と異り、近代詩文の發達すること最も後れたり。抑も古希臘の文化、壞廢して、清新の活氣從て消亡し、南歐の天地終に昏睡して覺めざること幾百年、之を北歐新興の民族に比するに、後者はなほ神話創造の時代を遠かること甚しからず、天地山川の外界より、內部生命の變動に至る迄、潑剌として生氣充滿せり。ケルト想は、歡樂、悲愁相半する慷慨の精神を齎らし、北人想は、海賊、戰士が掠奪的氣魄を傳へアルトゥル傳說となり、「ニベルンゲン」歌謠となり、「ビオウルヴ」となり、「トリスタン」となり、中世藝文の歴史に華麗雄渾の態を擅にせしが、伊太利亞はフィリカヤ Vincenzo da Filicaja (一六四二—一七〇七) 一代の秀句として、人口に膾炙する美人薄命の喩に洩れず、アルピ連山を越えたる諸民族が襲撃に疲弊して、活動したる大文學を起すべき氣力なし。然れども、中世漸く末路に瀕し、封建の制亦壞頹して、富源貨殖の道開け、人民の精神的需要、昔日の比にあらざるに、新機軸ある伊太利亞文學の久しく勃興せざりしは何故ぞ。他なし、羅馬古代の文化、中世を貫通して、湮滅せず、感化永く民俗の間に浸染して、莊重嚴肅なる羅甸語が、全半島の文語として理解せられたればなり。假令エルギリウスは魔術師となり、又其「第四牧歌」の故を以て、基督教界の預言者に列せられたれど、詩歌の翫賞は全く影を南歐に絕ちたることなく、僧侶の徒少しくオヰディウスを改竄して誦讀したるものありきといふ。伊太利亞の民は、なほアイナイヤスの後裔にして、羅馬市民の言語を記憶し、又理解す。されば雄大の氣魄なく、熾烈の情熱なき者、未だ曾て試に上らざる粗鹵の俗語を以て、風雅の天地に入るゝ能はざりしも宜なり。

伊太利亞の人、既に斯くの如く、希臘古代の文化を傳承せりと思惟し、教化、學藝かたばかりながら舊時の觀を傳へて、饗舍庠序の類、やゝ昔日の風を移したれば、多少の歴史思想は、民俗の間にも傳播して古代帝政の榮華を忘れず、從つて神話傳說が、此開明人中に起らざるも怪むに足らざるなり。歴山帝遠征、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com